

芝浦工業大学大学院客員教授
谷口博昭

道21世紀新聞が発行されて9年経ち、今回は第40号である。厳しい環境下にあつてNPO法人として発行を続けてこられた関係者のご尽力に敬意を表する次第である。

私も発行当初からこの欄

(Open Place)の意がある。私の姓「谷口」は「ハハロ」に分解され、順序を入れ替えると「ハロハロ」、「ハロ」||「公」の2乗と勝手な解釈をしている。価値観が多様化する中で、道路は、公共事業||悪という流れに沿って批判的に取り

として高い評価を得てきている。「道の駅」登録制度発足から21年を経て、現在1014の駅が登録されている。少子高齢化・人口減少の厳しい環境下にあつて「道の駅」の更なる進化を期待する声が大きい。「道の駅」は道路利用者や地域住民の「開かれた場所」であるとの原点に立ち戻つて、自主的、独創的、柔軟な種々の取り組みによる進化が望まれる。

進化した「道の駅」が地域発展に貢献

「ハロハロ」を受け持ち支援してきたが、改めて「ハロハロ」の意味について触れてみたい。

「私」の自由と権利が優先主張されがちだが、同時に他人の自由と権利を尊重することが求められる。同様に「私」は「公」を尊重することが求められる。「私」の幸せの上に「公」の幸せが、

更に、進化した「道の駅」が、点から線へ、線から面へと続くことにより、地域が全体として持続的に発展することを

「公」は、「ハ」(開かれた)と「ム」||「ロ」(場所)に分解されるので、誰もが自由に使用できる「開かれた場所」

に「公」の幸せが、「公」の幸せの上に「私」の幸せが、れ、地域活性化の新たな拠点

期待したい。